
一週間

NAO

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

一週間

【Nコード】

N4763A

【作者名】

NAO

【あらすじ】

大好きだった祖母の死。蝉の鳴き声が、俺を包んでいく…。一週間、それは蝉が謳歌する時間。祖母が100歳を迎えるはずだった誕生日までの時間。

(前書き)

共同企画小説。テーマは『一週間』。共同制作の先生方の作品は「一週間小説」で検索すると見ることができます。

一週間

蝉の鳴き声が聞こえる。

甲高く、それでいて耳障りだ。うだるような夏の暑さ、肌を焼く日差しが、俺を溶かしていく。

田舎に帰ってきた俺は、軒下に座って庭に生える大きな木を見つめている。真夏の太陽が、黒い服を身にまとう俺を焼き尽くす。

「孝介、今日は疲れたでしょう」

「……いや、別に」

母が俺を気遣う。

「なら……いいのよ。それじゃ、私は挨拶してくるから」

俺の肩に手を置くと、手に持っていた数珠が鳴った。喪服を着た母の額には、大粒の汗が浮かんでいる。

「疲れてなんかないさ」

俺の答えに安心したように、母は小さな笑みを浮かべて去っていく。

庭で一番太い木に向かって、蝉が飛んできた。

音もなく木に張り付くと、すぐに大声で歌い始める。一回り大きな歌声が、耳を貫いた。

孝介や、これでアイスクリームでも食べなさい。

「楽しみだったな、お金ももらえるの……」

祖母は俺が田舎を訪れるたびに、母の目を盗んでは、お金を握らせてくれた。嬉しそうにお金を眺めている俺を発見した母は、祖母に向かってよく注意したものだ。

お小遣いは与えているんですから、むやみに与えないでください、と。

「アイスクリームか……百円で十分なのにな」

千円をくれるその暖かい手が、いつしか楽しみになっていた。母の実家であるこの田舎を訪れるたびに、俺はお金をもらえると思っ

て嬉々として母についていった。

太い木に取り付いた大量の蝉。下手くそな合唱は、途中で脱退するメンバー、参加するメンバーが相次いでいて、まったくまとまる気配がない。自己中心的なメンバーばかりだ。

「お兄ちゃん、ここにいたんだ。おばあちゃんに挨拶してきたら？」
妹の知美が俺の隣に座る。学校の制服を身にまとう知美にも、汗が浮かぶ。

「あとで、挨拶するよ」

知美は俺の背中についたほこりを払ってくれる。知美の指が背中に文字を書くようで、くすぐったい。

「喪服姿のお兄ちゃんを見るのって初めてだから、なんか新鮮」

正直、喪服なんて買いたくなかった。

大学の入学式のためにスーツは買っていたが、喪服は必要ないと思っ買って買わなかった。それに、俺にそんな機会が訪れることなんてないと思っていたから。喪服を買うなんて、夢にも思っていなかった。

「お兄ちゃん、かつこいいいか？」

「妹にそんなこと聞かないですよ。……でも、友達は、格好いいって言うってたよ」

「その子、紹介してくれよ」

知美が舌を出す。

「ヤダ」

二人のやり取りを埋めるように、蝉が叫ぶ。

深い悲しみがそこに横たわっていた。その悲しみがあまりにも深すぎる時、人は誰よりも冷静でいられる。現実感もそうだ。どんなに悲しいときでも、冗談を言ったり出来るほど、俺たちはいつでもおりでしかいらなかった。

どうやって悲しんでいいか、俺には分からなかった。

「おばあちゃん……元気だったのね」

九十九歳だった祖母。

「一週間後には百歳だったのに」

「ああ……」

思い出がたくさんあったはずなのに、今でも覚えている思い出は数少ない。過ごしてきた時間も多はずなのに、短い時間だったと感ずる。

「あ、ネクタイ曲がつてるよ」

知美が俺の首元に手を持ってくる。

「もうすぐ社会人なんだから、ネクタイを締める練習しなきゃ駄目だよ？」

「難しいんだよ、なかなか」

どうやら途中から直すのは無理だったようだ。ネクタイを解き始める。俺はシャツの襟をたてて、ネクタイを締めやすくした。

二人の会話は無い。

ただ、蝉の鳴き声だけが響く軒下。広い庭、ところどころに生える雑草、黒い革靴をよじ登る蟻。

細かな風景が、非現実的に感ずる。

知美が俺の首にネクタイを巻きつけた。首から下がったネクタイの端を交差させて、一度小さな結び目を作る。

「知美、お兄ちゃん、まだ信じられないんだよ。ばあちゃんが死んだなんて」

結び目を手で握り、ネクタイの端、太いほうを結び目の中に通す。前に来たときは、あんなに元気だったのに」

玄関先で挨拶すると、奥の部屋から、まるで駆け出さんばかりに祖母が飛び出してきた。しわくちやの顔を、あらん限りの喜びで満たして、俺に抱きついてきた。年甲斐もなく大喜ぶする祖母に、俺は顔が引きつってしまっていた。

しかし、居間に手招きする祖母を見てみると、なんだか恥ずかしいようで、嬉しかった。

「ばあちゃんさ、いつも同じジュースしか出さないんだよ。お茶菓
子も、いつも同じ煎餅」

祖母の家の戸棚には、いつも同じお茶菓子が並んでいた。ハツカ飴と、丸いしょうゆ煎餅、黒くて甘い豆もあつた。世代間の差が、若い俺の口に合わないものばかりだった。それに、いつも細長いサイダーの缶を呑まないか、と聞いてくる。もうそれは飽きた、と言うと、祖母は決まってお金をくれるのだった。

「年寄りには分からないから、とか言つて、お金くれるんだよ。俺、お金が欲しくてそんなこと言つたわけではないのにさ……」

上手く結べなかつたのか、ネクタイを締めなおそうと解き始める。「仏壇に飾つてあるばあちゃんの写真をじつと見つめているとさ、にらめっこしている気分になるんだ。今にも笑い出しそうで、俺、負けてはいけないような気がして、ずっと見つめ続けるんだ」

知美が、再びネクタイを俺の首に回す。

「結局、勝負は俺の負けなんだ。まったく、ばあちゃんはさすがだよ」

結び目を作つて、その中を通して。

でも、うまく大きな結び目を作れなくて、それを喉元に引き上げると不器用な形をしていて、また解く。知美はそれを繰り返している。

「知美、無理するなよ」

「……お兄ちゃん……お兄ちゃん……私……」

黒いネクタイが、俺の膝の上に落ちる。

「……おばあちゃんが……死んじゃつたなんて……信じられないよ……」

泣きじゃくる知美の背中を、優しくなでてやる。シャツにしみこんでいく知美の大粒の涙。俺の胸の中で肩を震わせている。

「俺だつて我慢してるんだから。だから、泣くなよ。頼むから……」
木にとまる蝉の姿がぼやけていく。

目頭が熱くなって、あふれ出そうになる。

蝉はそんな俺たちなんか気にも留めず、ただ歌い続ける。精一杯、あらん限りの気力を振り絞つて。

「ばあちゃん、すごいよな。俺たちなんか及びもしないくらい、立派に生きたよな」

俺の言葉を聞いて、知美はついに大声で泣き出した。

俺のシャツを握り締め、蝉のように大声で。

赤ん坊のように、ただ泣くことだけにだけに力を込めて。

蝉は一週間しか生きられない。地中深くに何年もいて、やっと外に出れたと思ったら、歌える時間は一週間。夜は歌わないから、実際はもっと短い時間だろう。

ただ歌うことだけに全力を尽くし、そして、地面に落ちる。

「精一杯生きたよな」

九十九年と三百五十八日。ばあちゃんの生きた歲月。

「知美、俺……ばあちゃんに会ってくる」

知美は俺の胸から体を起こし、涙を拭く。

「うん……おばあちゃんによろしくね」

いまだに止まらない滝のような涙をたたえて、知美は笑った。

「はい、ネクタイ。ごめんね、お兄ちゃん、私……」

「気にするな。ほら、ハンカチ」

「ごめん……ごめん……お兄ちゃん……」

笑みを作るはずの顔をくしゃくしゃにして、再び泣き出す。

俺の渡したハンカチを握り締めて、頬をこわばらせる。ハンカチを使おうともしないで、ただ涙を流し続ける。

醜い顔だと、笑おうとしたが、俺は笑うことが出来なかった。

俺も人のことは言えそうにないから。

「行ってくる」

油蝉のかすれ声が、いつまでも耳にこびりついて離れない。

せめて、祖母が百歳の誕生日を迎えるはずだった一週間後まで、精一杯歌って欲しい。

生きることの出来る一週間を、精一杯、謳歌して欲しい。

俺はネクタイを締める。

一週間

蝉時雨が、次第に遠ざかっていった。

(後書き)

興味を持ってくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。
感想、評価、栄養になります。

一週間

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4763a/>

一週間

2008年11月7日08時10分発行